

## 行為・行為者・行為者性

川瀬 和也(宮崎公立大学)

行為は、行為以外の出来事やプロセスとどのように区別されるのだろうか。また、その際に、行為者はどのような役割を果たしているのだろうか。あるいは、行為者以外の要素が重要な役割を果たしているのだろうか。本発表では、近年の行為論の発展を踏まえつつ、この問題にアプローチする。

G. E. M. アンスコムは、論文「実践的推論」で、「行為」とたんに生起していることをまず区別し、それから、われわれが「行為」について語る、ということがどういふことなのかを明確にしようとする」という仕方で行為を予め与えることはできないと論じている(Anscombe [1989] 2005)。

ここでアンスコムが「標準的アプローチ」を帰属させるデイヴィドソンは、実際にはもう少し複雑な議論を展開している。初期のデイヴィドソンは、意図的なものとして記述されるような出来事が行為だとした。しかし、この分析は、その後のよく知られた意図に関する分析の進展の中で宙づりになる。初期の議論は、純粋な意図のようなものは存在しないという考えに支えられていたが、この考えが放棄されるに至ったからである。

初期デイヴィドソンのアイデアは、因果連関の外にある神秘的な「行為者」のような存在者を排除し、我々の心理状態だけから行為を説明しようとする点にあった。しかし、その後の行為論の展開のなかで、デイヴィドソンが消去しようとした行為者の役割が再び問題となる。

デイヴィドソン以後の行為論は多様な展開を見せているが、行為者の概念に的を絞って言えば、近年の議論の枠組みをなすのは、M. E. ブラットマンとJ. D. ヴェルマンの論争である。ヴェルマンは、デイヴィドソンの議論が我々人間の行為者性を十分に捉えられていないことを指摘し、「行為者」を復活させようとした。これに対して、ブラットマンは、自身の「計画理論」や、H. フランクファートの欲求の階層モデルのアイデアを活用することで、行為者という存在者なしで、デイヴィドソンよりも複雑な行為者性を説明できる理論の構築を試みている。

いずれにせよ、近年の議論においては、行為者性の複雑な特徴を説明できなければ、行為についての説明を与えることはできない、とするアプローチが標準的となっている。行為者性を備えた行為者が特定され、そのような行為者によってコントロールされた出来事ないしプロセスが行為だとされるのである。

C. コースガードは、行為者によってコントロールされているか否かによって行為か否かが決まる、というブラットマンの基本的なアプローチを共有しているが、しかしより微妙なニュアンスのある議論を展開しているように私には思われる。(ただし、ブラットマンはこのことに気づいていないようである。)コースガードによれば、確かに行為者は行為の原因となり、行為者をコントロールするが、同時に、行為において行為者自身が構成される。したがって、この描像では、ある出来事/プロセスが行為であるか否かと、行為主体が行為者として認められるか否かは、同時に判定されるということになる。行為と他の出来事との区別という観点からすれば、このことには大きな意義があるように思われる。

ところで、M. トンプソンは、上述の議論の流れとは異なる視点から、「素朴な行為論」と呼ばれる独特の行為論を展開して

いる。トンプソンの主張によれば、行為Aの合理化において、それを引き起こした心的状態による合理化よりも、行為Aを含むようなより大きな行為Bによってなされる合理化の方がより基礎的である。例えば、「なぜキーボードを売っているのか」と問われたときに、「論文を書きたいからだ」と答えるよりも、「論文を書いているのだ」と答える方がより基礎的である。このトンプソンの議論においては、合理化における行為者の役割が、従来の諸理論とは大きく異なっている。したがって、行為と他の出来事やプロセスを区別の問題についても、行為者に訴えるのとは異なるアプローチが採用されていると思われる。

また、これとは全く異なる観点からも、行為と出来事やプロセスの区別という問題は再考を迫られている。近年、R. スタウトとH. ステュアートを中心に、行為は出来事であるのか否か、また、出来事ではないとしたらどのようなプロセスなのか、といったトピックが盛んに論じられるようになってきている。デイヴィドソンにおいて前提されていた、行為は出来事の一つであるという見解そのものが、議論の俎上に上がるようになってきているのである。

こうした状況にあつて、A. フォードは、アンスコムやトンプソンの影響下で、行為と出来事の区別がいかなる問題であるのかについて画期となる論考を提出している。フォードによれば、行為は出来事の範疇的な種であるという形而上学的な特徴を持っており、これまでの理論はこのことを見逃している。

本発表では、議論が深まる一方で混沌とした状況も見せつつある行為に関する問題圏に、行為とその他の出来事やプロセスの区別という観点からアプローチする。これを通じて、行為の説明における行為者の役割について議論を提起したい。